二〇一一年六月二五日

雨蛙ポストの上に平伏す　とろうち
鮎の宿檜皮葺なる外厠　つくし
百度石夏草の背に隠れけり　治男
標本のごと鮎の骨抜けにけり　よし女
艶やかに濡るる玉砂利滝しぶく　菜々
段畑を登りゆくごと夏の霧　よし女
夜濯や思い出多き旅衣　有香
吉野路の万緑に旅惜しみけり　きづな

二〇一一年六月二四日

夕焼雲褪めて富士の灯点り初む　とろうち
蛍狩り歓声上がる山の宿　よし女
白無垢や女人高野の石楠花は　ぽんこ
三尺寝律儀に靴の揃へあり　きづな
緑陰の風に誘はれまわり道　美咲
湯上りのすっぴんのまま蛍狩　きづな
夏の蝶抗ふごとくもつれけり　あさこ
序幕の碑寿ぐ如く夏の蝶　百合
膳の鮎清流泳ぎゐし姿　わかば
線描の彫りの涼しき磨崖仏　有香
更けてなほ月下美人といふ貴賓　うつぎ

二〇一一年六月二三日

旅果つになほ旅ごころ胡瓜もむ　きづな
と見る間に葉裏に紛れかたつむり　ともえ
句短冊に主を偲ぶ庵涼し　小袖
蓮華座となる夏草や磨崖仏　かれん

二〇一一年六月二二日

緑陰の句碑をはしごやホ句の宿　満天
湯ほてりに風心地よき蛍狩　なつき
磨崖仏供花とす白き山法師　きづな
九輪塔尖りし杉の青嶺かな　わかば

山水に育ちて清し花菖蒲　あさこ
青芝の広ごる河原魔崖仏　わかば
石鼎庵衣紋に掛かる単衣もの　小袖
天窓に青葉迫れる山の宿　なつき

二〇一一年六月二一日

顔つきはどれも生真面目青蛙　とろうち
巡りゆく石の八つ橋花菖蒲　雅流
生まれ出て殻透きとほる蝸牛　菜々
田の隅に所在なげなる余り苗　せいじ

二〇一一年六月二〇日

梅雨空に朱の旗幟著き地蔵堂　ひかり
萍の田の面さざめき風見ゆる　はく子
青田風鎮守の森を要とす　菜々
メロディに渡る信号風薫る　宏虎
木も石も謂はれを持ちて苔の花　とろうち

二〇一一年六月一九日

川音の闇に轟く梅雨の宿　わかば
梅雨晴れて赤銅色の富士現るる　とろうち
老幹の洞の深さや苔茂る　ぽんこ
老鶯と祝詞唱和す鎮守かな　英子
単線路続くかぎりに麦の秋　きづな
声明の朗々として朝すずし　百合
髪染めて吟行支度七変化　つくし
お隣さん採らないのかしら枇杷たわわ　菜々
蟇咽喉は早鐘うちにけり　宏虎
白南風や漁港に隣る一末社　有香

毎日句会みのる選・二〇一一年八月二日